



禅の友

ZEN
no
Tomo



ご本山だより
大本山永平寺【歳末助け合い托鉢】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



いよいよ雪が降り始める季節になりました。一月前まで、色とりどりの秋の色彩だった境内は、白と黒の二色に変わります。まるで水墨画の世界に入ったかのようです。

例年、年末に行われる歳末助け合い托鉢は雪が降り積もる中行われます。素足にわらじを履き数時間も歩く修行僧の脚は、寒さと冷たさで真っ赤になります。途中で昼食のおふるまいをお受けする際は洗います。冷え切った脚にはぬるま湯も突き刺すような熱さを感じます。寒い中長い距離を歩くため、身体も心も疲れている中でいただく温かい食事は、格別の美味しさです。ご準備をいただいたやさしさと気づかいに心から感謝の念が湧いてきます。こうした経験によって修行僧たちは、自らの修行に取り組む姿勢を改めるのです。

本来托鉢は僧侶が生きていくために食事の施しを受ける行為でした。生産活動をしなない僧侶に対して、信者が自らの財産である食事を施すのです。即ち、施す側は自らの財産を手放すという修行であり、受ける側は思い上がった自尊心を静め、すべてを縁起にお任せするという修行です。施された食べ物には、多い少ない、高価か安価かなどの比較や価値判断がなされません。施す人、受ける人、施されるもの全てが何にもとらわれることなく巡っていきます。

いまでもその姿は何も変わっていません。修行僧の姿をみるなり迷うことなくお布施をしてくださる方。それをお受けし一心に偈文(げもん)を唱え黙々と歩く修行僧。お釈迦さまの時代から続く仏教の原風景です。



ご本山だより

大本山總持寺

【「臘八摂心」を迎えて】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



「光陰矢の如し歳月人を待たず」とはよく聞くことばであるが、今年ほどそれを感じた年はなかったような気がする。

コロナ感染症も五類感染症に分類され、マスクの着用は自由となったものの、厄介にも度々の変異株になり、まだまだ危惧しなければならぬ。

大学のころ耳にしたことばで、どなたが言われたかは確かではないが、「年年歳歳 春に先んじて臘八来たる」ということばを聞いたことがある。

新春が訪れる前には厳しい臘八という修行が毎年来るのである。そんな意味であろう。

禅寺では年中の最後の行持として一日から八日未明まで「臘八摂心」といって一切の行持を停止して参禅に打ち込む修行が行われる。

これは、釈尊が臘八（十二月八日）の暁に大悟して成道したことに因ん

だ一年最後の大切な修行期間なのである。

天童如浄禅师は「参禅は道心を持つことが一番に大切なことである。たとえ、仏教や禅に学問があったとしても道心がない人にはそれを持續していくことはできない」ときっぱりと言っている。

道心とは菩提心と言っても良いであらう。

道を求める熱烈な心である。

天台宗の開祖最澄さまもこれを「国宝とは何物、宝とは道心なり。道心のある人、名づけて国宝となす」と言っている。

宗派を超えて道をもとめる道心・菩提心の大切さが伝わってくることはである。

この行持が終わると總持寺ではいよいよ新年を迎える準備に入っているのである。

選・坊城俊樹

潮騒はそのままに海霧深まり来

北海道 堺 隆

評 これぞ正統的な客観写生の句。そして余計な主観的な言葉を入れずに見事な省略が効いている。北海道の海の変遷の風景が目の前に広がって行く。季題の「海霧」の海がどんどん霧に閉ざされて行く景色がどの読者にも見えなくてはならずだ。

野分あと確と海向く風見鶏

兵庫県 内藤 昭子

評 「野分」は秋の暴風のこと。これは海から吹いてきた風だったのだろう。風見鶏はその方向をしつかり捉えて微動だにしない。台風というより二十十日あたりの秋の風を言うので、ただの強風でなくどこか風情のあるものととらえられる。

◆ かなかなや僕むふりのミルクティー

山口県 稲村みどり

◆ 小さい秋見つからぬま田端駅

千葉県 長澤きよみ

◆ 秋暑しスリット入りのワンピース

埼玉県 伊藤 博

◆ 秋の蝶パントマイムに仲間入り

大阪府 花谷広文

◆ 入相の鐘鳴り渡る大花野

秋田県 高橋カツ子

◆ 送り火の煙の行方は天の道

北海道 中西千晶

◆ 焼酎に女子会少し荒れて来し

岐阜県 大下雅子

◆ 清かなる夜を揺さ振り走馬灯

島根県 俵 保恵

◆ 女ぶり漢ぶりよし風の盆

東京都 長谷川瞳

◆ 西空を仰いでをりぬ魂迎へ

愛知県 紅林廣子

選者吟

秋蟬の神に諭され鳴き止みぬ

俊樹

作句小見 この神とは自然界を司る神くらいの意味である。秋の蟬はもう晩秋なのに独りぼっちで寂しく鳴いていることがある。それを知った神は、お前はもう墜ちて土に還りなさい。そしてお前の子がまた七年後に生まれて来るのを私が見ているよと。

選・長澤 ちづ

知らぬ間に落ち葉濡れぬて雨となる秋の
狭庭の刈込み急ぐ

鳥取県 眞山博允

評 秋の雨がものさびしく音もたてずに降る様子が、作者の庭仕事をとおして詠われていて味わい深い一首。こうしてそれと意識せぬ間に季節は冬へと移行し、時は流れてゆく。上の句の緩やかな調子と、下の句の慌ただしさの緩急が巧み。

夫逝きて一人眺むる遠花火はじけるたび
に寂しさの増す

福島県 小原富子

評 夫が元気な時は共に眺めた花火を今年は一人で見るといふ寂しさの表現は典型的ではあるものの、思いは良く伝わる。「遠花火」であれば尚のこと。下の句の増幅感も効果的。

◆ 塩味をちよつと効かせた零余子飯父に供えて秋を樂しむ
埼玉県 小熊 星子

◆ 風鈴が好きで吊るした十数個夜店みたいと妻は笑いぬ
鳥取県 徳本 義則

◆ 亡き母の嫁入り道具と聞きをりし洗濯板は今も堅牢
北海道 加藤 智子

◆ あやふやなスキップ踏みつつ幼子は繋ぐ母の手大きく揺らす
山口県 橋本 美知子

◆ 週二回りハビリウオーク先を行く妻はときをり見返り阿弥陀
鳥根県 横山 麩吾

◆ 山峡の朝の広場に高齢者らグラウンドゴルフの音を響かす
鳥根県 宮庭 恒雄

◆ 風もなく音なく银杏散りゆきて根元に黄色の円描きたり
ロンドン バロー 典子

◆ 浅野家の菩提寺といふ境内に西見さくれば海のかがよふ
広島県 徳永 進一郎

◆ 赤シャツの初老の人が黙々とホース手繰りつつ床面に水撒く
三重県 藤川 幸子

◆ 大浴場の鏡に曲る己が背を見て見ぬふりす相容もなく
兵庫県 前田 あつ子

選者詠

脱皮する飛蝗みまもりおごそかなひとときのあり
秋のおくつき
ちづ

作歌小見

小熊さんの一首、「塩味をちよつと効かせた」ところがお父さまの人柄を暗示しているようですね。徳本さんの歌の「夜店」の響えが言い得ています。バロー典子さんのロンドンの大银杏にも心ひかれます。